

大学院教育学研究科・教育学部

Graduate School of Education and Faculty of Education



掌 暎

教育がつくる日本の未来

世紀の転換点にあって、「子どもの問題」があらためてクローズアップされています。校内暴力、いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下、援助交際などが、この二〇年ほど急速に問題化してきました。そして、「一七歳の犯罪」。一連の問題事象は、人間形成の基本が深いところで歪み始めているという印象を掻き立ててきました。その印象がそれほど重視する必要のないものなのか、それとも由々しき事態の予兆なのか、今のところ定かではありません。しかし、学校教育のあり方を含めて、現代の生育環境の歪みを問い直す契機となってきたことは確かです。

教育 学習・成長 に関する

学際的・総合的研究

教育学は、そういう営みとしての教育を理論的・実証的に研究する学問です。およそ教育 という言葉で想起されるあらゆる現象、子ども・人間の発達・成長や生活・学習に関わる諸現象を対象として、その形態・構造・メカニズムや機能・性質・意味を究明し、もって教育の実践・政策や社会生活の改善に資することを目的とする学問です。

その意味で、教育学は対象によって成り立つ学問であり、教育学に固有の方法があるわけではありません。人間形成を指針とし、哲学、歴史、社会学、経済学、文化人類学、心理学、行政学、生理学などの方法を駆使して、教育現象を解明しようとする学問なのです。

したがって、大学院教育学研究科のスタッフが手がけている研究も実に多彩です。たとえば、イギリスにおける体罰の歴史を一八六〇年の学校体罰事件を手掛かりに思想的に考察した研究、日本におけるしつけの歴史や青少年問題の展開に関する研究、学歴社会の生成・展開や学校教育と労働市場との関係に関する研究、文化的マイノリティの適応問題をアイデンティティ形成・葛藤という視点から解明しようとする研究、子どもの学習・発達のメカニズムや学力形成の問題に関する認知・学習・発達心理学的研究、青少年の心的障害・関係性障害やその解決への心理臨床的援助に関する研究、カリキュラム・教育方法・教師文化や学校文化に関する実践的・理論的研究、教育行政やボランテア活動、身体のしくみや運動能力の形成に関する生理学的研究、体育・運動・スポーツの機能とあり方に関する研究、学力・心理・身体機能の測定や関連データの統計学的分析法の開発など、きわめて多岐にわたって多彩な研究が進められています。

大学院留学生や外国人研究員も多く、国際



的な研究交流も盛んです。

大学院教育学研究科・教育学部の組織と目的
大学院教育学研究科・教育学部は、左表のような六コース・一附属センターを擁して、研究・教育活動を進めています。その主目的は、教員養成ではなく、教育文化の研究とその担い手の育成、及び教育研究者の養成にあります。なお、教育学部附属中等教育学校は、中高一貫教育の実践教育を進めています。

双生児研究で世界的に誇れる貴重なデータを蓄積していることも特筆に値するでしょう。
藤田英典(ふじた・ひでのり) 大学院教育学研究科長)

大学院(総合教育科学専攻)学部(総合教育科学科)の構成

大学院	教育学部	教育学理論、教育史(日本)、教育人間学、教育史(西欧)
教育学	教育学	
比較教育社会学	比較教育社会学	
教育心理学	教育心理学	
生涯教育計画	生涯教育計画	
教育行政学	教育行政学	
身体教育学	身体教育学	
身体教育学	身体教育学	
学校臨床総合	学校臨床総合	

研究所として、

昭和三十七年に設置されました。海洋の物理過程、海流・気象の動態、物質循環、海底の地質構造・テクトニクス、海洋生物の生態学・生理学・生化学や水産資源の研究など、広範な海にかんする事象を、学際的・総合的に研究しています。本年度の改組により、六部門・一六分野となり、各分野には一名ずつの教授、助教授、助手が所属しています。

三隻の観測艇による標本の採取を行っています。毎年八にもものぼる研究課題の遂行のため、一日あたり平均二乗人、のべ五人が研究に従事して働いています。

本研究所は、海底下二メートルの試料を採取する国際深海掘削研究計画、海洋予報を実現する国際海洋観測システム、海洋生物の物質循環を研究する海洋フロンティア計画の積極的にかかわり、学際的・総合的に、本学術振興海の拠点大学方式による、インドネシア、タイ、マレーシアとの現地調査を含む共同研究とセミナーを実施しています。国際共同研究のために、海洋科学国際共同研究センターが平成六年に設置されています。さらに平成二二年には、海洋環境保全と海洋の利用開発を促進するため、海洋環境研究センターが設置されました。

海洋研究所の目玉はなんといっても研究船をもっていることで、船長をはじめとする乗組員も研究にかかせない存在です。太平洋の航海を主とする白鳳丸(三九九一トン)は、平成元年の建造時には世界一周も経験しています。昭和五十七年に建造された波青丸六六(六トン)は、国内の港を起点にグアム島付近までの航海を担当しており、一一名の研究者が乗船します。

究

一方、昭和四八年に大楯に設置された臨海研究センターは、黒潮と親潮がはいりこむ地の利を得て、サケが産卵遡上する三陸海岸で、

